

小内透 (編)  
『現代アイヌの生活と地域住民』  
(東京：東信堂)

パトリック・ハインリッヒ

北海道社会学会 編  
『現代社会学研究』第32巻(2019)別刷

小内透 (編)

## 『現代アイヌの生活と地域住民』

(東京：東信堂。)

### パトリック・ハイリンリッヒ

『現代アイヌの生活と地域住民』は、2008年から2015年の間に行われたアイヌと地域住民(和人)に関する大規模な調査の結果である。これらの調査は、北海道の新ひだか町、伊達市、白糠町、札幌市、むかわ町の五つの自治体で実施された。本書はこれらの調査結果をまとめる論文集であり、アイヌに関する政策がどの程度アイヌの諸問題に対処し、またそれらが地域住民にどのよう受け止められているのか明らかにしようとしている。調査は北海道大学のアイヌ・先住民研究センターと北海道アイヌ協会によって実施され、アンケート調査とインタビューを含んでいる。2008年にアイヌが日本で唯一の「先住民族」として承認されたことが、この研究の主な動機となっただろう。折々の生活実態に関する報告を除けば、アイヌ研究は常に歴史、考古学、人類学、言語学が中心を担ってきており、アイヌの社会や地域住民とアイヌの関係については研究の蓄積が薄い。したがって、本書は研究上の膨大な要請に応えるものとなっている。本書は、序章と終章を除くと、三つの主題の下、十章で構成されている。この三つの主題とは「本書の課題とアイヌ政策」、「アイヌの人々の生活の歩みと意識」と「地域住民とアイヌの人々との関わり」である。すべての章が既存の研究をおさえつつ進むので、アイヌ研究に詳しくない人さえ、この本を読むことができる。全体として本書は、北海道のアイヌ生活について、最新の包括的な描写となっている。アイヌや北海道研究に興味がある人にとつては必読書であろう。

第一部は、二つの章で構成される。まず編集者の小内透が、アイヌと地域住民に関する幅広い歴史的背景を紹介し、さらに五つの自治体における調査の範囲と目的を提示する。第二章は、地域におけるアイヌの歴史と自治体におけるアイヌ政策を論述する。これらの自治体における予算とその目的に明らかにした後に、調査の結果分析と討論の章に入る。

第二部は、学歴と階層形成過程の関係をテーマとする、非常に興味深い章で

始まる。アイヌの高校・大学進学率がその他道民より低いことは広く知られている。主たる理由は、貧困とアイヌに対する差別である。本章はこれらの事実のみに新しいデータを追加するだけでなく、アイヌの社会移動における学歴の役割を明らかにする。アイヌの出身階層が学歴と到達階層にどのような影響を与えるのか分析し、アイヌの場合、教育が上昇移動の可能性を開く役割をはたしていないことを明らかにしている。主たる障害は差別である。その結果として、アイヌの男性は農業、林業、建設業、女性の場合はいわゆる水商売といった、固定的な雇用分野を選択せざるを得ない。アイヌにとっても社会移動の問題は、最終学歴のみの影響にとどまらない複雑さを持っている。よって著者は、「アイヌの人々においては、出身階層から到達階層へ、あるいは学歴を媒介して到達階層へという普通見られるパスがほとんど機能していない」(110頁)と結論する。社会移動の例となるようなロールモデルが欠けているので、アイヌの状況は「カースト」のようになっている。

次の章は、アイヌ文化の実践とその内容についてである。アイヌの文化政策に関しては三つの段階が識別できる。1945年以降、アイヌの政策は「文化保存」を旨とし、1974年からは「アイヌ福祉」、そして1997年以降は「文化復興」が目的となっている。最初の段階から、すでにアイヌ文化の伝承が問題であったことがわかる。上の世代は、アイヌ語、アイヌ文化およびアイヌ宗教を継承しなかった。その理由は本章では探求されないが、1960年代以降のアイヌの観光ブームで、アイヌ文化が商品化されたことについて詳細に記述する。こうしたブームは、後年の博物館の設立や祭りの復興開催に決定的な役割を果たした。これらの制度化されたイベントや施設は、アイヌ自身にもそれらに対する新たな関心呼び起こした。1990年代以降の文化保存から文化復興への移行は、こうした流れによってもたらされている。

第5章はエスニック・アイデンティティについてである。この章は、国際的な比較の視野を持っている点で際立っている。エスニック・アイデンティティに関しては、一般に「否定」から「肯定」への移行が確認できるとされるが、アイヌの過半数はどちらのアイデンティティもないと報告する。結局、アイヌの間には多様性があるといえるだろう。特に若いアイヌにとっても、アイヌのアイデンティティのステイグマは消えて、アイヌ文化に関わることが彼らのアイデンティティに良い影響を与えている。また他のアイヌは、文化は受け入れるが、アイヌ・アイデンティティの主張は控えようとする。もっとも、多数がアイヌ文化に興味を持っていないという。結局「アイヌである」ことの意味は多様であり、個人に異なる効果をもたらす。このような傾向は、本書の中で繰り返し指摘されている。アイヌとしてのアイデンティティを持つこと、あるいはアイヌとして行動することは、選択の対象になっている (Maher 2005)。

— 2 —

第二部最後の章は、メディアを取り上げている。この章以外はすべての章が社会学的なものであるから、この章のテーマは新鮮で、興味深い。アイヌのメディアは主に日本語で運営されるが、アイヌに関わる問題、例えばアイヌ文化や特定の社会問題などを取り上げる。この章では、アイヌの様々な(通常は短期間しか出版されない)新聞やジャーナルについて詳しく紹介している。その後、ラジオやテレビ番組を取り上げて、これらのメディアの普及と影響も分析される。そして分かったことは、ほとんどのメディアが広く知られておらず、情報収集とためにもあまり使用されていないことである。これは、アイヌについての運動・学問とアイヌの日常生活の間に、ギャップがあることを示していると思われる。ここでは深く取り上げられないが、アイヌと琉球の(エスニック)メディアの状況はこの点で著しく異なっている(例えば杉田2013)。日常生活から切り離されているアイヌのメディアは、言語社会学者が「民俗化」と呼ぶ傾向があるのかもしれない。いわゆる民俗化 (folklorization) は、言語と文化復興のためには、あまり効果的でないアプローチである (Fishman 1991)。

第三部は、地域住民とアイヌの人々との関わりについてである。このセクションは差別に関する研究が始まる。本書の他の章と同様に、この章でも詳細なデータと分析がふんだんに提供される。最も重要な結果は、アイヌと地域住民の間で差別的認識に大きな差があることである。アイヌの72%は差別があると報告するが、和人でそう思うのはたった17%である。アンケートとインタビューに基づき、学校、恋愛・結婚、就職・職場における差別が検討されている。次の三つの章では、焦点がアイヌから和人へと移されている。まず、和人から見たアイヌとの交流が報告される。学校、恋愛・結婚、就職・職場に加え、日常生活も調査されるドメインとなっている。北海道では、特に都会の若者がアイヌとの接触が少ないなど、地域や世代で差があることが分かる。このような接触欠如は、例えば、(差別にも関わらず)アイヌ生活の多様な評価を誘起する。そのゆえ著者は、「アイヌについて知ることが交流につながるようなプログラムのさらなる充実が望まれる。学び体験が交流を促し、交流することが知識と体験への関心を深めるという環境を整えることが、より多彩で差別的ない交流が醸成する基本となると思われる」と主張している (246頁)。

次の章では、この問題を取り上げて、和人住民のアイヌ文化についての知識と体験を調査している。最近二十年の間に、和人のアイヌ文化についての知識と体験は改善してきたが、いまだに学校がアイヌ問題に関する情報をほとんど提供しないことともわかる。アイヌの博物館や展示会などは、学校よりも重要で

— 3 —

影響力があるようだ。現在、アイヌ文化に関する知識がある和人は約半数に過ぎず、アイヌ文化の体験に参加したと報告する地域住民は20%未満にすぎない。アイヌが日本で唯一認められた少数民族であること、また本調査がアイヌの歴史的な「本拠地」で行われたことを考えれば、この結果は驚くべき低さであると言わざるを得ない。

このセクションの最後の章では、地域住民のアイヌ政策に対する意識を検討する。アイヌの「生活の安定」、「教育の充実」、「雇用の安定」、「産業の安定」によって生活向上を目指す諸政策が、検討されている。この章も、シテイズンシップ概念に言及することで、国際的な視野を持っている。アイヌに対する政策とその評価は、地域住民とアイヌとで著しく異なっている。これはまた、和人の間でアイヌ問題に関する知識が不足していることの結果であると考えられる。それゆえに、この章は「自分の居住している地域を低く評価している人、地域から疎外されている人は、アイヌ政策に対しても否定的な態度をとるといふことになる」と結論している(294-295頁)。

本書の結論は、ここまでの章の簡潔で有益なまとめとなっている。アイヌの現在の困難は、単に歴史の結果であるわけではない。むしろ、現在のアイヌと地域住民の間に理解と連帯の欠如があることが問題だと言う。意識を高め、接触と交流を推進することに加え、日本のマイノリティとしてのアイヌの実情を、国際的な視野の中で考察する必要があると述べた上で、最後に、「その意味で、アイヌ民族を含め、先住民族の復権が進む歴史段階である現在、その後の未来に求められる先住民族政策のあり方を検討しておくべきであろう」(306頁)との発言で終わる。

#### デイスカッション

本書のすべての章はしっかりとした構造を持ち、それぞれに明瞭な結論で締めくくられている。また、インタビュー調査の結果が有効に提示されており、各章が生き生きと執筆され、非常に読みやすいものとなっている。以下、二つの理由で本書を高く評価したいと思う。まず、現代のアイヌの生活について最も良い情報源となっていること。また、同様に重要なことであるが、変化する日本社会について新しい議論の領域を追加していること。日本の社会変化は、地理的および社会的な周辺で加速しているため、アイヌのケースは現代日本社会一般に興味がある人にとって、興味深いものであるはずだ。

他方で、特に教育(第三章)とメディア(第六章)を取り上げる章は、アイヌと琉球の状況を比較することが、より有益ではないかと思われる。さらに言えば、現代社会における少数民族一般に関する研究を参照していない点は残念で

ある。マイノリティに関する一般的な枠組みが参照されない(例えば Kymlicka 1995)。本書に示された調査結果がどの程度一般的(etic)で、どの程度個別具体的に(emic)なのか分からない。また、調査結果の抽象化もない。アイヌが日本で認められた唯一の少数民族だからと言って、日本の他の地域や他のグループ(琉球、聾者など)に同様の状況が存在しないというわけではない。が、そうした人々との比較あるいは参照はどこにもない。同様の状況は他の近代社会にも存在するが、日本以外のケースや研究も参照されない。マクロ社会学的カテゴリー(性別、年齢、教育など)に基づく分析を超えて、例えばアイヌ文化がなぜ次世代に継承されなかったのか、あるいはなぜ「相違」が「差別」を生ずるのか検討されない。相違が大きいほど大きな差別を呼び出すパターンが繰り返り見られるが、このメカニズムも考察の対象とならない。本書で扱われるマクロ社会学の変数は、重要ではあるが多くの語ってはいない。「アイヌとわかる特徴を持った子どもは差別されるから」という理由をあげて結婚を望まないとはつきりと語るものが目立つ(242頁)というインタビューは引かれるが、なぜ「特徴」が「問題」になるのかわからない。

上記の限界はしかし、この本の全体的な貢献を減らすわけではないと思う。今後、本書で論じられたデータと結果を出発点として、アイヌとマイノリティに関する研究が深められることになるだろう。今後の研究は、なぜマイノリティには「排除」あるいは「同化」の選択しかないのか、ということを明らかにしなさいといいたいだろう。日本あるいは他の近代国家における同化と排除のメカニズムを理解しなければ、生活向上を目指す政策が不調に終わるだけではなく、文化的(また身体的)な差異の維持と生活向上を同時に達成することができなくなってしまう。現在の社会科学的なアプローチは、こうした問題に対処することに制約があるかもしれない。現代アイヌの生活と地域住民といった事例を研究するには、理論的な挑戦が避けて通れないのではないだろうか。

#### 文献

- Fishman, Joshua X. (1991) *Reversing Language Shift*. Clevedon: Multilingual Matters.  
Kymlicka, Will (1995) *Multicultural Citizenship*. Oxford: Oxford University Press.  
Maheo, John C. (2005) 'Metroethnicity and the Principle of Cool', *International Journal of the Sociology of Language* 175/176: 83-102.  
杉田優子 (2013) 「複合メディア化するローカルラジオと奄美・琉球諸島の危機言語」『ことばと社会』15: 41-62.

(Patrick HEINRICH, Ca' Foscari University of Venice)  
(patrick.heinrich@unive.it)